

雪が作るコミュニティ

1月の大雪より感じだごと

国文学科2年 熊谷未来子



近年の暖冬で昔ほどの積雪ではなくなったものの、やはり私にとって(雪国育ちの人はみんなそうでしょうが)「冬の生活」と雪道は、切っても切れないものです。そして日常の中に、雪によるパニックも喜びもあります。

私が生まれ育った秋田市は、一年中日本海からの風が吹きます。湿気が多いながらも(都留と比べて)涼しく、過ごしやすい夏と、日本海から冷たい風が吹きつける冬、そして米作りに適した肥沃な秋田平野。ちょうど、都留市とは正反対の自然環境と言えます。秋田市にも山はあるのですが余り大きくなく、都留のように大きな山が迫ってくる感じはしないので、初めて来たときはとても驚きました。そして、南に(正確には西に?)来たのだから夏暑いのは納得いくとしても、シヨックだったのは冬の寒さでした。冬といえば冷たい風と雪、というイメージしかなかった私にとって、晴れていて風もないのに寒いのは何だか不思議です。風ならば物陰にいれば避けられますが、都留の寒さは地

面からしんと冷えるようで、逃げ場のない感じがします。

雪といえば、一月に関東地方に大雪が降りました。雨戸を開けると降り積もっている雪。愕然とすると同時に、秋田出身の私は懐かしさに思わずにつこりしてしまいました。しかしすぐに、雪に対して備えのない地方に雪が降ったときの不便さを痛感したのでした。

それはちょうど、実家で成人式を済ませ、都留に帰ってきたときのことです。幸い、私が帰る日にはJR線もほぼ復旧しており、復旧率五〇%の富士急行線にもうまく乗車できました。一番大変だったのは、アパートまでの帰り道。車道の雪を両側によせていった結果なのでしょうか、歩道がないのです。車にひかれそうになりながら車道を歩かざるを得ず、とても怖い思いをしました。実家のほうでは、除雪車がよせていった雪はすぐに各々の家で片付けるため、歩道が全くなくなる程にはまずありません。もちろん、きちんとキレイに雪寄せをしてあったところもありましたが、ほとんどはその

まま山盛りになっていたり、獣道のような細い通路があるだけ(しかも開通せずに途中で切れていたものも多数)、という所が多いように感じました。

また、その歩道にたまった雪の処理の仕方にも驚かされました。ある夜、偶然友人と歩いていて目撃したのですが、まるで工事現場で砂利でも積むように、ショベルカーで豪快にトラックに雪を積んでいたのです。正直、ゴゴゴ：：という音を立てて処理している様子は恐ろしかったです。雪のない地方ではこんなふうに対処しているのか、とシヨックを受けました。と同時に、実家にいるとき歩道が歩きやすかったのは、本当に一人ひとりの力が集まったものだったのだと痛感したのでした。

雪国では、雪が積もる度によせ



なくてはなりません。そうしなければ生活に影響しますから、何度でも根気よくよめます(東北の間は我慢強いと言われますが、それはこのへんから来ているのかもかもしれません)。しかし、その雪よせによってコミュニティが発生しているのも確かなことです。自然に對し、共同して対する意識があると私は思います。それぞれの家で雪よせすることによって全体として歩きやすい道になる。誰かが「団結しよう」と呼びかけているわけではないけれど、不思議なコミュニティが発生して雪という自然に対処しているのです。

実家のことばかり書いてしまいましたが、きつと都留市にも何かこういうコミュニティがあることと思います。そんな、この土地に住んでいなければわからないようなことをもつと知っていききたいと思っています。

